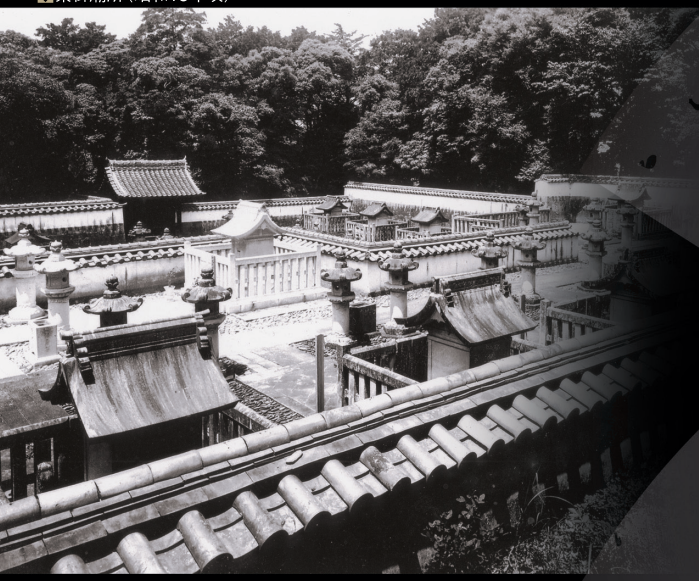
文化振興展

# 深溝本光寺は墳墓の地なり

―深溝松平家歴代墓所―



東御廟所（昭和15年頃）

西御廟所（昭和15年頃）

## ごあいさつ

本展示のタイトルに用いた「墳墓の地なり」という言葉は深溝松平家の歴史をまとめた『深溝世紀』の5世忠利の記録に出てくる言葉であり、また7世忠雄墓所に納めてあった墓誌にも刻まれています。深溝松平家がいかに本貫の地である三河深溝を大事に考えていたかうかがい知る事ができる言葉です。

本展覧会では、歴代墓所の紹介と当主ゆかりの道具、また今年3月末～5月末におこなわれた松平忠雄墓所の調査資料や出土品の一部を展示します。展示を通して深溝松平家の「墳墓の地」に対する思いを感じていただければ幸いです。

平成21年12月

幸田町教育委員会

凡例

・本書は、文化振興展「深溝本光寺は墳墓の地なり－深溝松平家歴代墓所－」（平成21年12月4日～6日開催）の図録です。
・本展示では、数字の混乱を避けるために深溝松平家当主については○世、藩主については○代と明記しています。
・展示した資料のうち、図録には写真を掲載していないものがあります。
・本書の企画・執筆は、神取龍生（当教育委員会主事）が担当しました。

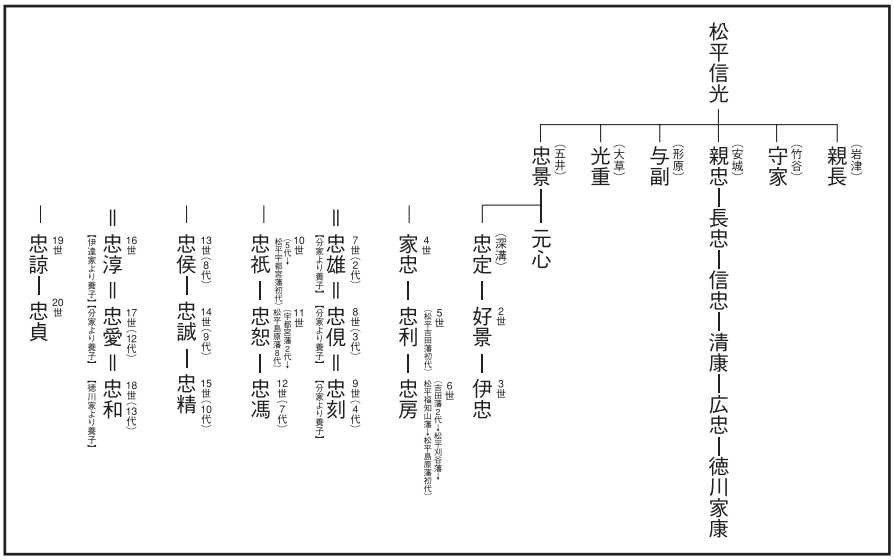
## 深溝松平家

深溝松平家は徳川将軍家を支えた14松平の一つにあたります。同じ14松平に列せられる五井松平家とは同じ始祖を持つ家同士であり、その始祖は松平信光の息子である元芳（寛永諸家系図伝）もしくは忠景（寛政重修諸家譜）といわれています。成立期の家系は混乱している部分が多く、近年の研究では松平忠景（文明17年（1485）没と伝えられている）が信光の息子ではなく孫以降の代であり、大永3～6年（1523～26）に深溝城に居り、既に深溝家を創設していた可能性が指摘されています。今後の調査によっては深溝松平・五井松平家の成立について新たな事実を提示できるかもしれません。なお本展示においては、深溝松平家の初世は通説通り忠定として進めていきたいと思います。

さて深溝松平家ですが、歴代惣領家（安城・徳川）への忠義は篤く、版図拡大における重要な合戦には従軍し、2世好景は永禄4年（1561）に松平元康と吉良義昭との間でおこなわれた善明堤の戦いにおいて、3世伊忠は天正3年（1575）の長篠の戦いにおいて、4世家忠は慶長5年（1600）の伏見城の戦いにおいてそれぞれ戦死するなど、壮絶な最期を遂げています。5世忠利以降は松平一族として幕藩体制の確立・安定に尽くしており、東海道の要地である三河吉田を治めて以降、三河刈谷、丹波福知山、肥前島原、下野宇都宮、肥前島原の各藩主として藩政の確立と為政、また島原藩主の時代には西国大名の監視と長崎出島の監督という重要任務を果たしていました。

歴代当主は槍働きや為政手腕のみに優れていたのではなく、文化にも造詣が深かったことが『家忠日記』や『深溝世紀』などに記録されています。記録には柴屋軒宗長・谷宗牧、里村紹巴などの連歌師、小堀遠州や狩野探幽などの芸術家などと深く交流をしていたことが書かれています。また本光寺が所蔵する歴代当主から寄進された多くの香炉、松平忠雄墓所から出土した香道具一式の存在から、当主が香道を嗜んでいたこともわかります。

深溝松平家はこれらの文化を介して他大名との交流を深めていました。『深溝世紀』には5世忠利が吉田藩主の時代に、伊達政宗と頻繁に茶会を開いていたことが記録されており、両者が親密な関係であったことがわかります。石高差のある大名同士が親密になることができたのは「松平家」という家格だけではなく、当主自身が文武・為政手腕において優れていたことが交流を可能とした理由の一つと思われます。




**安城松平・徳川家と深溝松平家の関係**（新編岡崎市史を参考に作成）

**忠雄墓所出土香道具**　深構松平家蔵
右より銀葉挟、香匙、香箸

**鳳凰文団栗秋虫紐角香炉**
本光寺蔵
蓋には団栗と秋虫も模った紐が取り付けられており、胴部には鳳凰が舞う。忠房寄進。

**栄螺形兜**　本光寺蔵
伊忠が長篠の合戦にて着用した兜
鉢部分に和紙で栄螺を装飾したもの

**家忠使用の長鋒の槍**　本光寺蔵
源為朝の鏃を槍先としたものとして伝えられている。伊忠より形見の品として譲り受けた一品であり、伏見城の戦いの際に用いた。元文３年（1738）、島原藩家臣渋川主膳が寄進。

## 墳墓の地

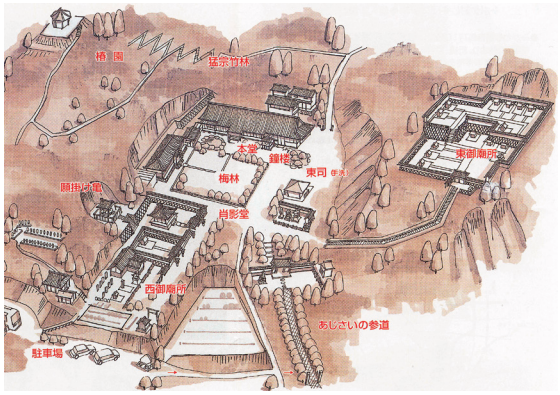
深溝松平家の【墳墓の地】である曹洞宗瑞雲山本光寺は、松平忠定によって希聲英音和尚を開山に迎え創建されました。当初は同町深溝字向野から会下後一帯に建てられていたと伝えられています。『家忠日記』には本光寺に行くことを表す「会下へまいり候」という言葉が多くでてきます。現在の小字にある「会下後」は、寺院があった頃の名残かもしれません。いつ頃に移転したのか不明ですが、『家忠日記』に移転の記録がないこと、忠房の頃には現在の位置に寺院が存在することから、忠利の頃に整備された可能性が考えられます。

当主が三河吉田藩主として吉田に着任して以降は、各封地に建てられた寺院が本寺として瑞雲山本光寺となり、三河深溝に残された寺院は末寺として瑞渓山源光寺と称するようになりました。深溝に残された源光寺が本光寺に改称するのは延宝元年（1673）のことです。

さて深溝松平家の最終封地である島原には現在も瑞雲山本光寺が存在します。深溝と島原に存在する本光寺（深溝本光寺、島原本光寺）は、両山とも深溝松平家の菩提寺になりますが、島原本光寺は封地における菩提寺として常の仏事に関わり、深溝本光寺は歴代当主の遺体を納める菩提寺【墳墓の地】として位置づけられています。深溝本光寺の役割が定められた理由についてですが、文久２年（1862）に島原藩家臣佐久間維財によって書かれた『深溝誌』には「５代忠利の遺命」とあり、少なくとも幕末時点での島原藩内においてはそのように伝わっていたことがわかります。

深溝松平家のように封地ではない場所に全代の当主の遺体を埋葬する例は非常に珍しく、他家にはわからない、深溝に対する強い思いがあったのでしょう。

**希聲英音和尚肖像画**　本光寺蔵




**深溝本光寺境内図**

**忠雄墓所墓誌**
**（レプリカ）**　本光寺蔵右
墓所の石室には碑が刻まれた墓誌が配置されていた。
碑文には【墳墓ノ地也】が謳われている。

# 西御廟所

御廟所内には初世忠定～4世家忠の墓石、5世忠利を祀った肖影堂、11世忠恕の墓所、一族・家臣の墓石、祖宗紀功碑が築かれています。このうち4世までは墓石のみになります。本来は深溝向野一帯にあったと伝えられている「元本光寺」に築かれていたものと考えられます。祖宗紀巧碑には4世までの墓石がすでに西御廟所に築かれていることが刻まれているため、おそらく寺院地移転に伴い移設されたのでしょう。肖影堂は5世忠利の木造を祀った堂ですが、当然ながら遺体は深溝本光寺に埋葬されているため、この堂そのものが墓所と考えられます。この堂で注目しておきたいことは宝珠の下の箱棟に、深溝松平家の家紋【重扇】と水野家の家紋【沢瀉】が印されていることです。本光寺に伝わる忠利の遺品にも【沢瀉】が印されたものが存在することから、忠利本人と母方の実家である水野家との深いつながりがわかります。廟所の東側に広がる一族・家臣の墓石ですが、一族については『寛政重修諸家譜』や『福知山藩日記』などの記録から、墓所である可能性は高いと思われます。家臣については明らかではありません。

なお、現在「願掛け亀」として人々に親しまれている肖影堂の背後にある亀をモチーフにした石造物ですが、実は寛文12年(1672)に6世忠房によって建てられた祖宗紀功碑と呼ばれるものです。これには林鵞峰の撰(万治3年(1660))による、初世忠定以降の忠烈を謳った碑文が刻まれています。

**現在の西御廟所**
長年の風雪・災害により劣化がみられたため、肖影堂や11世忠恕墓所の門や周囲を巡る白壁は、昭和時代に修理がおこなわれている。

**昭和15年頃の西御廟所の写真**　原本本光寺蔵

**肖影堂（5世忠利廟）**
堂の正面に設置されている石灯籠が忠利逝去の翌年の寛永10年（1633）に建立されたものであるため、堂についても同じ時期に完成したものと考えられる。

**箱棟にみる重扇と沢瀉の組み合わせ**

初世～4世までの墓石。右より順に忠定、好景、伊忠、家忠

**松平好房墓所（忠房長男）**

父に先立ち逝去。深溝本光寺に埋葬された。東御廟所の石廟より一回り小さいが同じ形状である。忠房夫人より17年も前に亡くなっているため、深溝本光寺に築かれた同形状の石廟の中では最も古いものである。

**一族・家臣の墓石群**

使用されている石材が多岐に渡ることが指摘されている。三河・島原・宇都宮の各地で亡くなった者の墓石であることがその理由であろうか。

**鉄線唐草沢瀉紋蒔絵煙草盆**　本光寺蔵

5世忠利の遺品として本光寺に伝わる煙草盆。水野家の家紋のみがはいっていることから、母（家忠夫人）かその実家水野家から頂いたものであろうか。

**藤文獅子紐角香炉**　本光寺蔵

方形4足の角香炉。胴体には藤の花があしらわれており、蓋には獅子をかたどった紐が取り付けられている。忠利の菩提を弔うために納められたもの。裏面には「奉寄進　爲源超大居士菩提　利廣敬白」の銘が切られている。

# 東御廟所

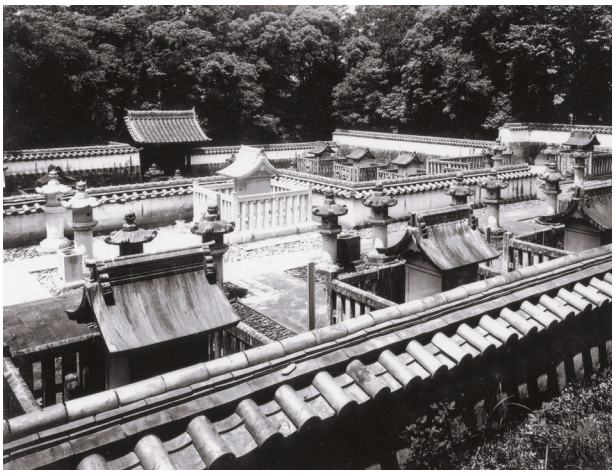
御廟所内には、島原藩歴代藩主にあたる深溝松平６世から19世（11世は除く）までの計14基（当主13基、正室１基）の墓所が築かれています。石廟（せきびょう）は切妻造りの屋根を持つ神殿を模した造りであり、大きさと形状はすべて統一されています。石廟内部には内面が全面布張りの開閉式の木室が配置され、その内には木製の位牌が納められています。神殿をかたどった石廟は東御廟所を造営した忠房が神道への信仰が篤かったためともいわれています。このようにすべてが同じ仕様で造られているようにみえる墓所ですが、忠房夫妻と忠雄以降の墓所には決定的な違いが存在します。それは玉垣（たまがき）の門扉に付いている扇の模様が、忠房夫妻は扇の形に刳り貫かれていますが忠雄以降になると重扇の模様になっているという違いです。忠房夫妻墓所の門扉のみを異なる扱いにしたことにはなにか理由があってのことと思われます。

この御廟所には忠房夫人の墓のみが築かれており、以降の当主の子女の墓所は存在しません。なぜでしょうか。『深溝世紀』には忠定夫人以降、正室は本光寺（元及び現）に葬られたことが記載されています。西御廟所には家忠・忠利・忠房の息子の墓所が築かれています。そう考えると忠房以降のための墓域に、【墳墓の地】に葬るという深溝松平家の家訓に沿って夫人の墓所を築くことは決しておかしなことではありません。そうなると当主以外の墓所を島原や江戸に築くことにした７世松平忠雄以降に注目する必要があります。今後の調査に依るところが大きいですが、このことは深溝松平家当主というよりは、島原藩を治める為政者としての立場が関係しているのかも知れません。

この廟所の造営には岡崎の石工が関わっていたことが寺院に残る記録や忠雄墓所に納められていた棟札から明らかとなっています。貞享（じょうきょう）３年（1686）に逝去した忠房夫人の墓が造営されて以降、石都岡崎の優れた技術によって300年以上もの間、廟所が守られてきたのです。

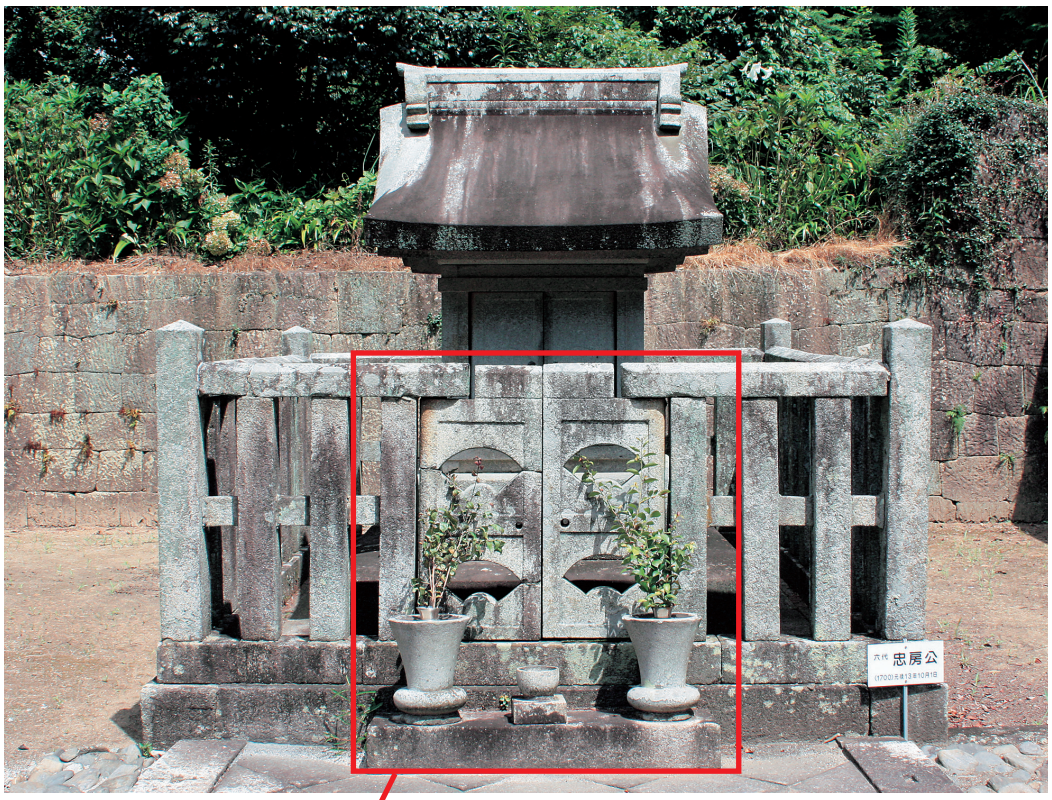
**現在の東御廟所**
ほぼ同じ方向から御廟所内を撮影したもの。長年の風雪や地震・水害などの災害により、いたる所が崩れていることがわかる。

**昭和15年頃の東御廟所の写真**　原本本光寺蔵



**筋兜形香炉（すじかぶとがたこうろ）**　本光寺蔵
６世忠房によって寄進されたもの。鉢の部分を外して香木を置くことができる。裏には「唐銅胃香爐一具寄　参州額田郡深溝郷瑞雲山本光寺　延寳九辛酉年六月五日　肥前國高來群嶋原城主　従五位松平主殿頭源忠房置」の銘が切られている。

**杏葉紋磁器腕（きょうようもんじきわん）（染付・赤絵）**　本光寺蔵
杏葉紋は鍋島家の家紋であり、６世忠房及び息子好房の正室の実家である。本光寺には６世夫妻の膳が残されており、本資料も忠房の時代に属するものであろう。



7 世以降の墓石の門扉

上の写真と左の写真を比較すると門扉の仕様が異なることがわかります。詳しくは現地で実物を見てください。

墓石の建立には１年近くかかっていることが松平忠雄の逝去日と棟札に書かれた日にちより明らかとなっています。逝去後、製作を依頼したのでしょう。「島原藩日記」における忠房夫人の葬儀では、墓石が完成するまでは青竹による仮垣が築かれていたとありますので、当主の墓所についても同様であったと思われます。

**染付唐子文香炉**（そめつけからこもんこうろ）　本光寺蔵

胴部には唐子の遊ぶさまが配置されている。箱には 10 世忠祇が逝去した「享和元年酉九月十四日」が墨書きされている。忠祇の遺品として寄進されたものであろう。

**色絵仙人図鉢**（いろえせんにんずばち）　本光寺蔵

19 世忠諒によって寄進されたもの。明治維新後、松平家は神道へ改典したが、父祖歴代の墓地がある深溝本光寺を非常に大事にしていた。底部外面には木米の銘款が書き込まれている。

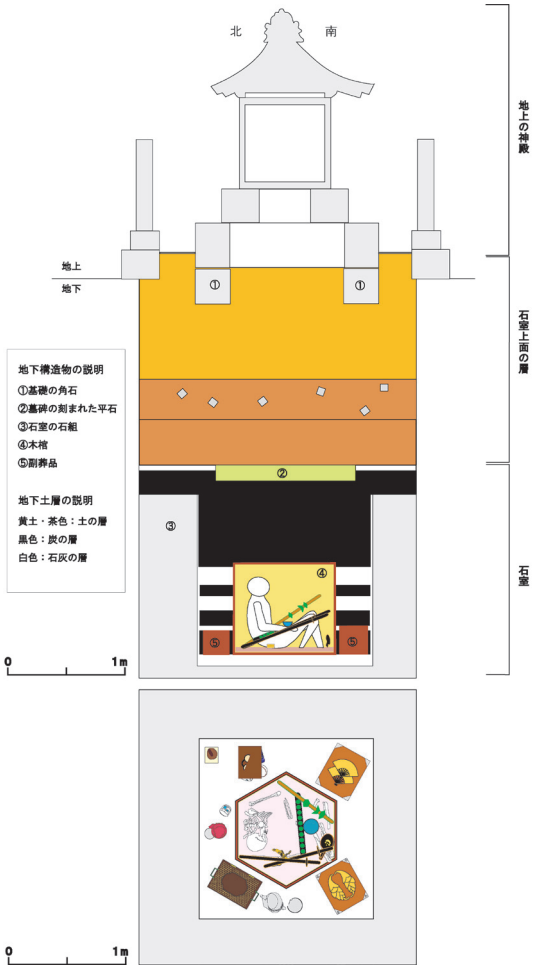
# 松平忠雄墓所

松平忠雄墓所の発掘調査は、平成20年８月末豪雨により傾いた墓所の復旧のためにおこなわれたものであり、本光寺から依頼を受けた本光寺深溝松平家東御廟所調査会（代表赤羽一郎）によって、平成21年３月末～５月末におこなわれました。調査終了後、調査結果を基にした修復がおこなわれ、６月初旬には修復が完了しています。

今回おこなわれた調査は、様々な分野に大きな情報を寄与することとなりました。学術的には、譜代大名である松平一族の墓所の調査は全国でも初めてであり、また墓所に採用されている木棺の形状や石室構造が今まで確認されている大名墓とは異なることや、副葬品についても大大名と比べても遜色のない豊富さであることから、今後の近世大名墓の調査・研究に対して新たな情報を提供したことになります。また副葬品を美術工芸品としてみた場合、副葬された年代が確実であるため、工芸史を考えていく上で、重要な資料となってきます。

幸田町内外への影響も非常に大きなものがあります。本光寺・調査会・地元区が地元対象におこなった現地説明会では317名の見学者が、６月に本光寺がおこなった調査速報展では9,000人以上の来館者来ています。幸田町内のみならず、町外・県外の方々においても、深溝松平家に対する関心が高い証拠ともいえます。

今後は本光寺文化財調査指導委員会の指導のもと、本光寺・本光寺深溝松平家東御廟所調査会・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・幸田町教育委員会により報告書作成にむけての整理作業と、本光寺そのものの文化財調査を進めていきます。今後の整理作業の進捗に応じて順次、情報を公開していきたいと思います。




忠雄墓所模式断面図・石室平面図

調査の様子

流水桜蒔絵印籠　深溝松平家蔵

表面には流水と桜が見事に蒔絵により表現されている

小判　深溝松平家蔵

慶長・享保・正徳製が含まれる。

染付八角鉢　深溝松平家蔵

胴部外面には瓜系の植物と、それにとまる芋虫・蝶が描かれている。


## 謝辞

今回の企画展を開催するにあたり、多くの方々にご協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。（敬称略）
深溝松平家、本光寺、本光寺深溝松平家東御廟所調査会、西尾市岩瀬文庫、駒澤大学図書館、駒澤大学禅文化歴史博物館、岡崎市美術博物館、島原市教育委員会、赤羽一郎、鶴田悟裕、都築数明



文化振興展
**深溝本光寺は墳墓の地なり－深溝松平家歴代墓所－**
2009年12月発行
監　　修▣本光寺深溝松平家東御廟所調査会
編集・発行▣幸田町教育委員会
印　　刷▣共和印刷株式会社